

「平和を尋ね求め、追い求めよ」 (詩編 34:15)

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、
槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げずもはや戦うことを学ばない。」
(イザヤ書 2:4)

2013年4月16日(火)～22日(月)にかけ、沖縄で「第2回世界聖公会平和協議会」が開かれ、韓国、日本、フィリピン、オーストラリア、カナダ、アメリカ合衆国、イギリス、アイルランドの聖公会から約80名が参加しました。そのテーマ「東アジアにおける平和と和解に向けて」は、参加者すべての祈りであり、ビジョンでありました。このビジョンは、2007年に開かれた第1回世界聖公会平和大会(TOPIK)において合意された宣言に基づいています。そしてまた、復活したキリストの福音に基づいています。キリストは弟子たちのもとに現れ、「あなたがたに平和があるように」(ヨハネ 20:19)と言われ、彼らを派遣して(ヨハネ 20:21)主イエスの模範に従わせ、「遠く離れているあなたがたにも、また近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせる」(エフェソ 2:17)ように命じました。私たちは「すべての命と尊厳を守る」という召命に応えるように、また世界聖公会(アングリカン・コミュニオン)の宣教の5つの指標、特に「社会の不公正な構造の変革」と「被造物の保全」という課題へと召されています。

この協議会は日本聖公会と大韓聖公会による共同開催でした。開会礼拝の説教において、日本聖公会首座主教ナタナエル植松誠師は「私たちが、自分の権利を放棄し、他者の権利、或いは権利さえ持たされていない人々を守ろうとするとところに平和の種が蒔かれる」と説きました。米国聖公会総裁主教キャサリン・ジェファーツ・ショーリ師の主題講演では、「世界のどこにおいても平和と調和の実現は、私たちが共通する人間性を持っていること、誰もが自らの存在を尊ばれたいと願っていること、子どもたちと私たちを取り巻く世界について様々な希望を持っていることへの気づきにかかっています。」という言葉で締めくくり、私たちは大きな励ましを受けました。また、カンタベリー大主教ジャスティン・ウェルビー師から送られたメッセージにも大きな感銘を受けました。大主教は「危機感が高まっている時期にこのような機会が持たれることを感謝し、南北の敵対感情を和らげ、朝鮮半島の恒久平和に貢献できること」への期待を語り、「放射線被曝に対する止むことのない不安に直面し、原子力政策および軍事産業を巡る諸問題に取り組んでいる」日本聖公会に対する連帯を表明しました。

私たちは様々な話に耳を傾けました。沖縄の人々の声を聞き、講演者の話に学び、朝鮮半島の平和統一に向けた取り組みと北朝鮮の人々に対する人道支援(TOPIK)、および各国から報告を聞きました。それらは、東アジアが未だ「産みの苦しみ」(ローマ 8:22)の中にあり、軍事力拡張および核兵器拡散の迫り来る脅威と、原子力発電の恐ろしい結果に脅かされており、更に私たちの国々が、戦争への足取りを辿っているという危険な兆候を示しています。特に日本の平和憲法改定の動きは、東アジアの安定を更に脅かす恐れがあります。私たちは幾多の人々の苦しみと、母なる地球の破壊を思い、紛争の解決手段としての戦争に対する明白な反対を宣言します。戦争を許してはなりません。私たちは、「血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手に」(エフェソ 6:12)闘っているのです。

私たちはまた、この地域において平和と和解に対する強い願いがあることを、改めて知りました。私たちは、朝鮮半島の平和統一に向けた取り組みと北朝鮮の人々に対する人道支援を行っている大韓聖公会の働き、また東日本大震災の被災者の必要に応えようとする日本聖公会の働きが、日韓両聖公会の協働によって支えられていることを高く評価します。私たちは正義と恒久平和のために闘っている沖縄の人々の揺るぎない信仰と不屈の精神を学びました。こうした働きに世界聖公会の諸管区が連帯し、祈りと協働・物質的支援によって苦しむ人々を支えようとしていることについて神さまに感謝します。

行動への呼びかけ

私たちはこの協議会を通して、様々な言語と考え方に会い、キリストの体における多様性と一致を強く認識しました。キリストの名において結ばれている世界聖公会に対して、次のように呼びかけます。

1. 平和と和解への取り組みと情報の共有のため、聖公会東アジア平和ネットワークを構築し、世界聖公会既存のネットワークを強化すること。また本協議会の報告を広く共有すること。
2. 大韓聖公会の朝鮮半島の平和統一に向けた対話を促す取り組みと北朝鮮の人々に対する人道支援（TOPIK）の活動を引き続き支援し、積極的に参与すること。
3. 周縁化され、植民地的状況のなかで小さくされている人々、ことに沖縄の人々、東日本大震災と原発事故による被災者、フィリピンやその他の国々の先住民のために祈り、共に歩み続けること。
4. 1952年のサンフランシスコ講和条約によって、沖縄が本土から切り離された日である4月28日を、日本政府が新たに「主権回復の日」として祝おうとしていることに反対し、「不当な負担」を強いる軍事基地からの解放を求める沖縄の人々と共に声をあげること。
5. 「互いに重荷を担う」（ガラテヤ6:2）精神でこのような協議会を継続し、青年や女性の参加を保障し、その声が反映されるようにすること。
6. 軍事拡張と核兵器のさらなる開発を阻止し、国家間の緊張を高めるあらゆる企てに反対し、交戦権の放棄を表明している日本国憲法第9条の精神を広めること。
7. 東アジアおよび世界のすべての地域における戦争の犠牲者のために祈り、「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」方法を見出すこと。

閉会礼拝の説教において大韓聖公会議長主教パウロ金根祥師は「いま私たちは、平和に向けての険しい道の前に立っています。主は私たちに『さあ立て、ここから出かけよう。』（ヨハネ14:31）と招いておられます」と語りました。私たちは、互いの愛に結ばれて、正義と平和の共同体を造り上げるために努力しようではありませんか。平和の神が恵みによってそれを成し遂げてくださいますように。アーメン。

2013年4月22日

第2回世界聖公会平和協議会 in Okinawa

参加者一同